

西田公夫記念誌

ありがとう
うれしかった。



公夫さんありがとうの会



2000.12.19 敏子さんのお誕生日とクリスマスパーティーの席にて

座談会 敏子さん、孫と共に公夫さんを語る

西田公夫さんの妻、敏子さんと共に、孫のように接していた浦野愛、水野晶子、小野紗織で、公夫さんとの思い出について語り合いました。

浦野 1995年の阪神・淡路大震災後、名古屋の同朋大学に被災地復興支援サークルができました。私たちは3人もそこに所属していて、神戸へよくボランティア活動に行っていたんです。

敏子 震災当時は神戸市灘区に住んでいましたが、家が全壊してしまい、3ヶ月程経った後に愛知県にいた弟を頼って県外避難してきたの。

水野 ちょうど活動を始めてから2年ほど経った頃、私たちは県外避難された方々の応援をすることになったんです。その頃ですね。活動を通じてお二人と初めてお会いしたのは。

敏子 あの当時は、県外避難者に対する不十分な行政対応への悔しさや、いつも周囲から「県外避難者」と見られることに対する寂しさが募っていた時



期だったから、公夫さんがその気持ちを新聞などによく投稿していたんです。それが少しずつ溜まってきた頃、「自分の生きた証としてこれをまとめたい」と話していました。だから今回みなさんに手伝って頂き、本当に本にして頂けたなんて本人も喜んでいるでしょうね。

小野 公夫さんの言葉で一番印象に残っていることは何ですか？

敏子 そうね・・・「出会いは宝」とはよく言ってたわ。地震で失ったものは大きかったけど、それ以上に多くの人たちとの出会いを得ることができた。今自分は本当に幸せだって。

水野 私は、何度かお見舞いに伺ったんだけど、どんなに苦しくても、「つらい」ということを周りに言わず、名古屋から来た私たちにいつものように気遣いをしてくださった姿が一番印象に残っているかな。本当に我慢強い人でした。お二人には何度「ありがとう」という言葉をいただいたか分かりませんが、本当の優しさをいっぱいもらいました。人としてお二人が好きです。

震災と共に歩んだ12年 ～阪神・淡路大震災からこれまで～

小野 私は、手紙でも電話でも、仕事の悩みや愚痴めいたことを話した時に、公夫さんは絶対に私のことを否定せずに「若いんだからいろんなことがあるよ。さおりちゃんは、その笑顔で頑張りなさい！」っていつも励ましてくれたことがすごく心に残っています。

浦野 私は「温かさ」かな。公夫さん

阪神・淡路大震災からこれまでの 西田さんと私たちの年表



のそばにいと、いつも心がほっとして
していました。自分がここにいていいん
だっという安心感。そして何かをした
ら「ありがとう」って心から言ってく
れるその一言が、自分の元気につな
がっていました。人の心や自分の心と
丁寧に、正直に向き合っていくこと
の大切さを教わりました。

敏子 いろいろな思い出がありますね。
何でも公夫さんと相談してこれまで
やってきましたから。とにかく優しい
人でした。公夫さん、もう少し長く
生きてもらって、もっと一緒に過
ごしたかったな、って思います。でも
こうして、たくさんの方が公夫さん
を慕って集まってくれたんだから、
私もがんばらなきゃなと思っています。

水野 そうですね。この本が皆さん
のお手元に届く頃、きっと公夫さん
は千の風になって、皆さんの傍で
一緒に読んでくれているかも知れ
ないですね。

小野 いつもみたいに「ありがとう」
って、力強く頷きながら。

浦野 公夫さんの残したかけがえ
のない時間をずっと忘れずに、こ
れから私達が「孫」として、この
本に書かれていますことをきちん
と受け継いでいきたいと思いま
す。

敏子 ありがとう。皆さんに本当
に感謝しています。

年月日 (お歳)	できごと	西田さん夫妻の動き
1995年 (70歳)		
1月17日	5時46分、M7.3 阪神・淡路大震災 発生	神戸市灘区にて被災。家は全壊、 近所の福祉センターへ避難。 ここで3ヶ月あまり過ごす が、次第に疲れが溜まり体調を 崩す。この頃「肺気腫」と診 断される。
	仮設住宅の建設 (約5万戸)	仮設住宅の抽選に3度外れる。 4回目に当たったが、不便な ところだったので入居せず。
4月ごろ	同朋大学 ボランティア ネットワーク発足	敏子さんの弟さんを頼りに愛 知県新川町(現清須市)に移住、 「県外避難者」に。
7月ごろ	震災から学ぶ ボランティア ネットの会(ネット の会)発足	被災者の声を集めた、「しん」と いう雑誌が中日新聞に取り上 げられ、「県外避難者」として 紹介される。これを機に公夫 さんの想いを語り続ける活 動が始まる。
8月ごろ	避難所の閉鎖	
1996年 (71歳)		
2月18日		名古屋市緑区で開催された 「みどりフォーラム96」にて 「ネットの会」会員の瀧川 さんと出会う。愛知県シル バーカレッジに入学。新聞 等に投稿したり、各地で 語り部として活動。
1997年 (72歳)		
3月17日	県外避難者支援 団体「With you あいち」発足	
4月19日	愛知県県外被 難者の会「りん りん愛知」発足	公夫さん、りんりん愛知の 代表となる。
1998年 (73歳)		
		公営住宅の抽選で神戸市北 区シルバーハイツが当選、 神戸へ帰郷。シルバーハイ ツ内で開催されていた「絵 手紙教室」に参加。これ 以後絵手紙を描く日々を 過ごす。
1999年 (74歳)		
2000年 (75歳)		
	仮設住宅の撤去	
	9月東海豪 雨水害	
		公夫さん、肺気腫のため 入院。その後在宅酸素を 使用しながらの生活に なる。
12月半ば		名古屋の孫たちと念願 の「ルミナリエ」へ。
2002年 (77歳)		
	特定非営利活 動法人レスキュー ストックヤード (RSY) 設立	孫たちと有馬温泉へ。
2003年 (78歳)		
	同朋大学 ボランティア ネットワーク解散	
2005年 (80歳)		
		公夫さんの、80歳の「傘 寿」のお祝いに有馬温泉 へ。
2007年 (82歳)		
	公夫さんあり がとうの会発足	年明けより風邪などにより 体調を崩され、3月、4 月と入退院を繰り返す。
6月7日		公夫さん、天国へ。

避難所生活

「不安と限界」

公夫さんが避難していた福祉センターは、多くの被災者の避難所となった学校などと比べて規模も小さかったからか、始めのうちは救援物資もあまり届きませんでした。

朝・昼はパン、夕は弁当、飲み物はお茶がコップに半分くらい。ミネラルウォーターも配られましたが、寒い季節でもあったので、冷たくてあまり飲まれませんでした。また、トイレの使用が不自由だったこともあり、知らぬうちに体は水分不足となっていました。

これが一因となり、公夫さんは脱水症状を起こしてしまいました。

避難所での生活を続けること3ヶ月余り、疲労もピークに達していたのでしょう、体調を崩してしまいました。また、その時に病院で受けた精密検査で「肺気腫」も見つかっていました。

その頃、神戸では避難所から仮設住宅への移住も始まっており、公夫さんらも申し込みをしていましたが、3回目までははずれが続いていました。

公夫さんの体を案じた敏子さんは、愛知県にいた弟さんを頼り、ひとまず愛知県に県外避難することにしました。

その時点では長くいることは考えておらず、一時的な避難としての愛知県への引越しでした。





新川町に来て

「新たな出発と 募る孤独感」

避難所での生活に限界を感じた二人は、愛知県の新川町に住んでいた敏子さんの弟さんを頼りに引っ越してきました。

最初は弟さんの家においてもらうつもりでしたが、いつまで避難生活が続くか分からないので、他に住むところを探してもらいました。

すると、新川町の名鉄須ヶ口駅にあった県営住宅の一室が空いており、早速入居をしました。

地震によって多くのものを失い、必要最低限のものしか持って来なかった公夫さん。

「ご飯を炊いたものの、いざ食べようと思ったら茶碗が無い事に気づいて、マンションの下のスーパーに買いに行ったんだよ。」と、私たちに教えてくださいました。

これが愛知県での新たな生活の始まりでした。



「戻れるものなら、戻りたいのですが…
…」と話す西田公夫さん、俊子さん夫妻

神戸恋し、でも家がない

神戸市灘区で被災した西田公夫さん(左)、俊子さん(右)夫妻は、震災から三カ月後、愛知県西春日井郡新川町に移り住んだ。新しい二人きりで住んでいた。震災町、知らない人。取り残されたような孤独感を味わった。被災地の情報が全く手に入らないのが、つらかった。知り合いが、たまたま送ってきてくれる新聞の切り抜きを、食い入るように読む。

震災後、兵庫県の公営住宅などに避難した人たちが「県外被災者」という。隣りの人がドアを破って助け高齢や病気のため、仮設住宅が整う前に、早く被災地

大震災後、愛知・新川へ移住 70代夫婦、募る孤独感

「公夫さんは、巡回の医師に「脱水症状なので、点滴を受けなさい」と言われた。だが、点滴を受けられなかった。昨日四月からは、家賃を払い始めた。友だちが欲しい、と県のシルバークラウドに「神戸を離れたくはないが、東海三県の公営住宅を探している」と書いた。西田さんたちは、不安の中で暮らしている。「住み慣れた町に戻りたい。でも家は無いし…」もう帰らねんのか」

（社会部・平岡 妙子）

知人少なくなじめず

被災地情報伝わらず

「神戸を離れたくはないが、東海三県の公営住宅を探している」と書いた。西田さんたちは、不安の中で暮らしている。「住み慣れた町に戻りたい。でも家は無いし…」もう帰らねんのか」

（社会部・平岡 妙子）

1997.1.17 朝日新聞

エッセイ No.3

炎 暑

新川町在住 西田公夫（個人会員）

西田さんは70歳。ご夫婦で神戸市灘区に住んでおられて被災されました。家の再建も諦め、友人・知人の多い神戸を去り、お二人で愛知県西春日井郡新川町の公団に住むことになり、現在にいたっています。

震災の語りべとしてネットの会の支援会員になって頂きました。これまで「トイレの思い出」「家、建つのか？」の2作を書いて頂きました。大変好評でした。今回も一味違った視点のエッセイをお寄せ下さったので掲載します。是非お読み下さい。

◆ ◆ ◆
 昨年の冬、神戸で震災に遭い、住む家を失った私たちは、多くの人の温情を頂きながら避難生活を送っていましたが、縁あってその年の春、爛漫の桜に迎えられて、この尾張の国に移住しました。

ここは騒音や排気ガスや煤煙などの公害に悩まされる心配もなく、又ベランダからの眺望も素晴らしく、見渡す限りの豊（いらか）の波。その向こうに霞んで見える養老の山並みに、雲を茜色に染めながら沈む夕陽を眺めていると、神戸では得られなかった安らぎを覚えます。

良い環境の所へ住むことができたと喜んでいました。ところが・・・梅雨が開けて土用に入ったとたん・・・真っ向から照りつける真夏の太陽の光は、強烈な熱波となり、すだれ、ブラインド、カーテンの三重の遮蔽（しゃへい）も容赦なく貫通し、室温を一気に上昇させました。クーラーも扇風機も全力で稼働しましたが、殆ど効き目はありませんでした。

名古屋の夏は聞きしに勝る暑さでした。

昨年の夏は神戸の方でも異常なほどの猛暑で、直射日光にさらされた仮設住宅の鉄板の屋根は、

「雀がとまったら、焼き鳥になるでえ。」・・・

冗談にしろ、そういわれるほど熱せられ、家の中は正に灼熱地獄の有様で、役所が付けてくれたクーラーも焼け石に水だったとか。

仮設に住む友人から電話がありました。

「今クーラー止めたらねえ、温度40度越えるやろね。ほんま・・・。マッチすつたら、まわりの空気、ポッと燃え上がらへんかと思う位の暑さよ・・・」

笑いながら話してくれましたが、よく理解出来ませんでした。

役所がせっかく付けてくれたクーラーも電気代がかさむのを嫌って使わずに、炎天下の戸外でわずかの涼を求めて木陰にたたずむ年寄の姿があったということも聞きました。

この春行われたアンケート調査によると、現在4万人以上の人達が仮設に居残り、その約90パーセントが将来出ていけるという目処が立たないそうです。

同じ友人からまた電話がありました。

「お金のある人は自力で家建てて出ていかはる。私らみたいに何も無いもんは、これから先どうなるんやろ思たら、寂しーいなってくるわ。住む期限1年延長されたいうても、何にも変わらへんよ・・・」

震災で家も家財も全部無くした時でも、一言の泣き言も言わなかった彼女、逆境に遇っても常に気丈に明るく生きてきた彼女が、初めて口にした弱音出した。

櫛の歯が欠けるように空き家が目立ち始めた仮設の様子も目に浮かびます。

行政側は自助努力、自助努力と口癖のように言いますが、今仮設にいる人たちにそんな余力が残っているとも思っているのでしょうか。

今年の夏の防暑対策として仮設のガラス戸の所に日除けのひさしを取り付けました。多少でも効果のあることを期待します。

仮設ではこの夏も、昨年が続いて炎熱地獄の苦しみを味わい、わずかな涼を求めて木陰にたむろする年寄たちを見ることになるのでしょうか。

エッセイ

No.6 関西弁で話したい

新川町在住・西田公夫（個人会員）

西田さんは72歳。ご夫婦で神戸市灘区に住んでおられて被災。神戸を去り、お二人で愛知県西春日井郡新川町の公団に住むことになり、現在にいたっています。

これまでに「トイレの思い出」「家、建つの？」「炎暑」「救援物資というけれど」「なんでや」の5作を書いて頂きました。定番のエッセイのコーナーに久しぶりの登場です。

西田公夫さんには、1面でも触れました「茶話会」の呼び掛けや、被災者の自主組織「りんりん愛知」の代表も兼ねて頂いています。ちなみに「りんりん愛知」の主旨は、「愛知県または近隣に避難・転居された阪神・淡路大震災被災者のネットワークで、情報交換・気軽な話し合いの場の茶話会を行う。帰りたい人が帰れる、住みたい人は安心して暮らせる県人会的な繋がり」というものです。

「そやさかい。あきまへん。よういわんわ、…」
羨しい、かまびすしいでは適切な表現とは言えない程の騒々しさで、皆の口から奔流のように迸りだした関西弁には、周りの人も唖然としていました。

土地に馴染みがなく、近隣との交流もままならない状態の中で余程関西弁に飢えていたのでしょう。

激震の日から2年余り経ったこの4月19日に「YWCA」や「ウイズ・ユウあいち」の皆さんの尽力により、かねてからの念願であった県外被災者の集いを持つことが叶えられました。

10名の参加者というささやかな集会でしたが、そのうちに疎開者全員と連絡がつくようになり、やがては眼を見張るほどの盛況を呈する時がくると信じています。

住む所を失い止むを得ぬ事情で県外へ避難するという共通点があったればこそ、初めから初対面という垣根が取りのぞかれて、年来の旧知の如く腹藏なく語り合うことができました。

それぞれ、言い尽せぬ程の辛い想いを胸中に秘めておられたことでしょうか、表に出すこともなく、



始終屈託もなげに言葉を交わしておられました。

裏方に徹して支援を続けられたボランティアの皆さんのおかげで、集会は成功裏に終わり、次回の集まりを約して帰路につく被災者の表情には、満足感が溢れているように見受けられました。

小さいながらも「りんりん愛知」として被災者の組織を誕生させたからには、それを大きく育てる責務があります。とは云え被災者自身には何の力もありません。今後も多くの人の協力を仰がねばならないでしょう。しかし組織の永続が目的ではなく、反対に1日でも早く解消することが本意であることを忘れてはなりません。

りんりん愛知発足

「独りじゃない。 仲間とともに」

愛知県に引越しをして約1年が経った1997年3月17日、兵庫県から愛知県へ県外避難した県外避難者を支援する「With you あいち」という会が発足しました。この団体が独自に県外避難者の名簿作りを進め、それをきっかけに翌月の4月19日には県外避難者の方の自主組織として、「りんりん愛知」が発足しました。

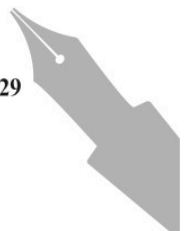
「りんりん愛知」では月に1、2回の茶話会を開催していましたが、そこでは同じ関西弁で話しができて、和みの時を過ごしたり、県外にいることで知ることが難しかった復興状況や仮設住宅について情報交換をしたりする貴重な場になっていました。

公夫さんは、この「りんりん愛知」の代表を務めました。

同朋大学に事務所を置いていた「ネットの会」でも、学生を中心にしながら「With you あいち」として、県外避難者の方をサポートしていこうということになりました。

この頃から公夫さんと学生との交流が始まりました。今から10年以上前のことです。愛知県に県外避難されていた方は、「With you あいち」が把握していた方だけでも、約50名ほどおられたそうです。

やむなく神戸を離れ愛知へ来たものの、慣れ親しんだ神戸を思い寂しい思いをしておられた方も多かったのではないのでしょうか。





We remember the great earthquake in the Hanshin area.

LiFe

(リフェ)

震災から学ぶ ボランティアネットの会

ニュースレター№20
1997年5月9日発行
発行責任者：西田文紀二
編集責任者：高川裕康
事務局：名古屋市中村区種差地町7-1
同朋大学ボランティアネットワーク(DVN)内
TEL & FAX：052-413-6304 〒453

【目的】

1. 阪神・淡路大震災による被災者支援の継続
2. 地元ボランティアの交流と実践
3. 今後の緊急時における積極的な行動

【構成団体・個人】

がんばろう!!名古屋/阪神大震災でお父さん・お母さんを亡くした中学生・高校生に奨学金を贈る中学生・高校生の会/自立の為の道具の会/同朋大学ボランティアネットワーク/日本福祉大学ボランティア情報交流センター/人業劇団ひらき座/あすけっと/名古屋YWCA神戸Y支援会/風呂バスボランティア連絡会/のみ山自然観察会/WAVE/災害ネット/がんばれこっぺチャリティコンサート実行委員会/日進・東郷・長久手・三好子育て支援ネットワーク/ (賛助団体) 1980 / 全電通労働組合名古屋支部 <その他個人会員129名> 【1997.5.1現在】

【具体的行動】

1. ニュースレターの発行と例会(学習会と情報交換)の実践
2. 運営委員会を推進母体とするイベント等の開催
3. 「全員が主人公」の原則による様々な意見や案の具現化

りんりん茶話会にて 県外避難者の会『りんりん愛知』発足



震災により愛知県に転居された西田公夫さん(ネットの会会員)の「県外避難者同士の交流をもちたい」という願いに応え、「With You あいち」のバックアップのもと遂に茶話会が実現しました。この会は去る4月19日、名古屋YWCAにて行われ、7世帯計10名の方が参加されました。自己紹介から始まり、当時住んでいた所の様子、震災当時の生々しい体験、転居してからの生活の変化など、現在の生活状況も交えて想い想いに話されました。この日初対面の方が多かったにも関わらず、同じ土地

に住んでいたこと、そして何より同じ震災体験をしたということが、お互いの心を開ききっかけになったように思います。話しの中では名古屋での生活環境や習慣の違いに対する不満も挙げられました。しかし、神戸出身のボランティアも駆けつけた為、会場の雰囲気はとても和み、皆さん「とても楽しかった」と帰っていかれました。

今回の茶話会で西田公夫さんの呼びかけにより、参加者全員の同意のもと「りんりん愛知」が発足されました。愛知県及びその周辺に転居された方同士の自主組織であることを原則に、毎月第3土曜日を茶話会の日としました。次回の茶話会からは「りんりん愛知」の方同士が主体となって茶話会を行うこととなります。「With You あいち」は震災により愛知県周辺に転居された方の名簿登録を引き続き行い、「りんりん愛知」の輪がどんどん広がるようなサポートをしています。現在、「With You あいち」には27世帯の方が登録されています。これからは各市町村の広報にも名簿登録の呼びかけを依頼しようと考えています。(With You あいち/杉浦朱美)

◆目次◆1頁・県外避難者の会『りんりん愛知』発足◆2頁・エッセイ6/西田公夫氏、BOOK REVIEW◆3頁・第8回例会報告、事務局長交替・宮嶋智也さん挨拶◆4・5頁・情報編◆6頁・取材＝静岡県ボランティア協会、緊急報告＝宝塚市松山さん県住に引越し◆7頁・運営委員会報告＝いこまいKOBE運営委員会◆8頁・連載12『ボランティアが覗いた阪神・淡路大震災』＝救援物資について考える10/神戸YWCA救援センター前責任者・前田圭子さん・第5回、事務局からのお知らせ、第3回総会のご案内

愛知県での"会"発足

震災から2年余り経った晩春の一日、名古屋のYWCA会館の一室では、支援者達の温かい笑顔に囲まれて、談笑している人達の姿が見られました。

愛知県へ避難してきた人達の憩いの場となる「会」が、やっとの思いで誕生したのです。

震災に遭った多くの方が、諸種の事情で県外へ避難されましたが、行政当局は「県外へ出た人は恵まれている」と一方的に決め付け、その実態の調査はされませんでした。

馴れぬ土地で話し相手もなく、加えて酷い情報不足の中で、時には心無い人の「被災者のくせに」との理不尽な言動にも耐えながら、ひたすら帰郷できる日を待ち続けた私達に対して「勝手に出て行った者の面倒まで見られへん」と言い放ち、不十分ながら被災地では施行された支援も適用されず、それどころか2年近くも放置されてきました。

幸いにも、困窮する私達の実情を知る人達が、その組織づくりの支援に立ち上がり、運動は大阪を中心に全国へと広がりを見せましたが、協力を要請した被災地の行政が、把握していた県外被災者の住所の公表を、プライバシーを理由に拒否したため難行しました。

そのため愛知県では、その事情を新聞に記載してもらい、連絡用の電話にボランティアの学生が交代で張り付くなど、粘り強く活動を続け、半年間で

やっと17所帯の名簿登録を見ることができました。

他県では、被災者が組織をつくろうにも支援者がおらず、また支援しようにも肝心の被災者の住居が判明しなかったと聞きました。

「りんりん愛知」と名付けた私達の会も、次第に参加者が増え、名簿登録者の数も50を数える程になりましたが、100所帯はおるだろうと言われた他の人達には、連絡を取る術がありませんでした。

集会に参加された方が先ず口にされた言葉は「話し相手がなく寂しかった」でした。

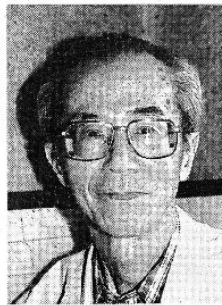
組織づくりが被災者の心のケアに役立ったのは確かですが、万事OKとはいきません。

公営住宅の募集が始まって、仮設優先のため私達への当選枠は極めて狭く、一次から四次までの募集に応募し、全部外れて悲嘆の涙に暮れた人もおられました。

「帰りたい帰りたい言うと思った主人、神戸の土よう踏まんと逝てしもた」と、沈痛な面持で呟かれた老婦人、また「92になる母が動ける間に神戸へ連れて帰りたい」と、常々話しておられた年配の女性の母御は、希望が叶へられぬまゝに亡くなりました。

この言葉は今でも私の耳朶に残っています。同じ被災者でありながら県外へ出たというだけで、なぜこのような差別をうけねばならなかったのでしょうか。

「りんりん愛知」代表 西田 公夫さん(72)



10人が集まりました。全
員を申し込んでおられて
最初対面、自己紹介
から始まりましたが、回
転して遅れてきたので
じつは強めの話が聞け
ました。5月17日の2回目には
世帯、24人と倍増しまし
た。次回は21日です。
△愛知県新川町の県
営住宅に夫婦2人で住
む。県外に避難した大

“情報”不足が悩み

△阪神大震災で家を
失い、こてを頼って兵
庫県外に避難。転居し
た人たちの自主組織が
「りんりん」。愛知県
にも4月、東海地方で
初のネットワークが誕
生しました。
大勢の被災者が来てい
ながら、連絡が取れず
はたかどらばり。関西に
ネットワークが誕生して
いる聞き、愛知にも欲
しいと考えていた矢先、
なまたま出会った名古屋
市内のボランティア団体
「With You あい
いち」(愛知県中村区

の同朋大卒)が名簿づ
きの引き受けてくれ、
△連絡を強め、被
災者で助け合っ
て再建に取り組みとい
うのですね。
被災者の多くが親類や
知人を頼って来ていま
すが、土地になじまない
ら、まず欲しいのが話し
相手。関西弁で思い切
りしゃべりたいとの欲求も
強い。4月17日に初めて
「りんりん愛知」の会合
を開いたとき、7世帯

たの悩みは？
私の場合、神戸市灘区
の自宅が全壊し、定年後
を夫婦のんびり過ごす
計画が狂ってしまいました。
た。なんぼ仮設住宅に入
りです。【坂東 伸一】



1997. 6 毎日新聞

活動報告 りんりん愛知 東山植物園散策レポート

文：浦野 愛

前日の台風から一転して澄み渡った青空に思
まれた6月21日(土)、東山植物園にて第3回
目の「りんりん愛知茶話会」が開催されました。
現在愛知県内に住まれている県外避難者の方
達で作られた「りんりん愛知」から12名、その
サポート団体「With You あいち」からボ
ランティア8名が加わり、計20名の参加者とな
りました。
会場が屋外ということもあり、参加された皆さん
の心も日頃の緊張や不安などから、少しばかり
解放されたのではないかと思います。回数を重ね
るごとに増えていく新しい顔触れを笑顔と拍手
で暖かく迎え入れ、皆さんがすぐに打ち解けてい
らっしゃる雰囲気を見て、まさしく「With Y
ou」=「共にいること」が形となっていること
を実感しました。
高齢の方もみえた為、照りつける太陽の下での
行動は難儀かとの懸念もありましたが、皆さん足
取りも軽く、終始笑顔とおしゃべりで思い思いに
植物園の散策を楽しまれていたようです。



昼食を兼ねた交流会では、若い夫婦から震災
直後の話題も出て「こんな話したの、ほんまに久
しぶりやわ。家にいてもほとんどせえへんもん
な。」と、こぼされてるのが印象的でした。
しかし、茶話会を通常の月1回から2回に増や
そうという声も上がっているように、メンバーの
中から頼もしい提案が続々と出てきております。
また一方で、神戸に帰られる方もいらっしや
います。「With You あいち」は「りんり
ん愛知」の活動を応援すると共に、去りゆくメン
バーを暖かい拍手で見送ってほしいと思っ
ています。

1997. 7 震災から学ぶボランティアネットの会ニュースレター「Life (リフェ)」

